

小精語鏡

以昭
澤和六年九月



特別
14
1919
706



紅雲園景

14
1919
91
706



小抄語鏡

才五冊
心華錄



○天地の外にもう一今の月 菊更
 ○彼一つ 殊子見えし所の月也と
 ○芋煮は鏡うしむから月見えんやと
 ○月毎見えし月見えしこの月の今方の月
 に似つ月どもとせし 元暦抄巻
 ○瓜ふむさ人や甲の下のきこししとせし

小抄語鏡

心華錄

○菊の花咲くや石屋の石の間
○猪力共は吹くや空の系

●雄現鎮

○臨淵筆次魚不如退而後怪
○花名一時為友千古
○名記其可
○紅菱黄花秋景空
○继性前来

○屋後数竿瘦竹、橋前一带流、
功鳥、七四の鳥 旭烟

○蒲公英其葉空、先花 清影入眼、夏 河、
却原花、河名 行、

○志学、終身不成 治生、尺寸與長 歎言、孫子循 良、不墮 祖先、徳 望、

○花、酒量 近宿、快 前、眼力 劣、行樂 何来、
何云、交也 直是、直 也、

○江天一望曉烟銷，殘月如霜影轉哀。失侶充腸
延致之，秋菡萏深宮或倦回。同上

○遠客貪程至日斜，深溪行旅亦驚譁。加山春
色今何表，荒驛停蹄看落華。同上 龍鹿山中

○蛩款蛩，夜未央，竹風蕭雨滿空涼。孤燈獨坐
披書讀，秋夜長。勝夏日久。同上

○烟淡碧潭，月黃柳深危岸。人行前渡，漁
火千點，遠嶽梵鐘數聲。同上

○天日淫霖，海潮蓬宮僵臥。日如年，每人橫得
不為去，炊飯龜頭伸脚我。安次川夜泊 同上

○郊有蒹田，壁有琴，島吹散口堅園。生未
未目吏人面，茅屋三間天比寬。同上

○牧罷春郊向晚，雨餘草色即漫。半醒半
睡家好，牛背安於外榻安。同上

○桂之重扇，秋雨春暄。紅葉樹，杏花村。
○人多き人の中は、人か多き、人とも人、人とも也

有...

有...

横

人

○負けて退く人を能くとせよふた、智恵の力の強
きをぬき

○常深き者いほ深き者、愛憎深き者いほ
勝者いほ者、ハヤード、テローロ

○自尊、自知、自治、一生を導くは王者の位に達
せしむ、テニウシ

○外に事なきものけしむぬ、要なきを内を破る栗

のいかに

○自責の心、人々、海つゝの術を、自治の心、人々
上は、術を

○柔く握るは切つて多くを握る

○武士の喧嘩に、徳家二人出来

○かたすんかかくさるやめと、むらさきと、止ふみ止ま
ぬ、大和魂

○人にまけじに、かちて我をまてず、義理をまてが

甲申(ま) ころも

○山深く何う庵を結ぶこころの中身かくんけり
○事なば送る位を予は送らざりて身こそ
やまゆし

○そのまゝのぢりぢりいんちやくしき人の庵井如
ころも

○あけも結つ心とけんや首引のちぢり人の休ま
ころも

○わりの通る人の習ひをと思ひ流る月澄むら
ん

○こころ只何の昔もささ大鳥の豆にひまると
此
ひうふ え園

○苗あかす太枝にふかすまひの後送とる胸
のぢりぢり

○咲かえんが梅の人の折らすを梅の仇はさくら
ころも

翁屋

17th Century

○元皇六年十月十二日夜解衣欲睡月色入戶欣然起行念無與樂者遂至承天寺尋張懷茂亦未寢相與步於中庭庭下如積水空明於中如藻荇交橫蓋竹柏影也何夜無月何處無竹但少閑人如吾者耳 東坡

○僕醉後輒心草書千數行便是酒氣拂之從十指出云云 東坡

○僧謂酒為般若湯謂魚為水梭花鷄為鑽

○離業竟無所益但欺而已世常笑之人有為不義而文之以美名者其此何異哉 同上

○吾文如萬斛泉源不擇地皆可出在平地滴之涸之雖一日千里無難及只其山石曲折隨物賦形而不可知也所可知者常行於所當行常止於不可不止如北而已矣其他雖工吾亦不能知也 同上

○獨不見夫羣虱之處禪中乎逃乎深縫匿乎

翰墨集

卷之四

敗絮。自以為吉宅也。行不敢離縫際，動不敢出禪
襪。自以為得繩墨也。然炎丘火流，焦邑滅都，群虱
處於禪中，不能出也。君子之處域內，何異夫五
之虞禪中乎。車坡阮籍評

○予飲酒終日不遇五合，天下之不能飲，無在予下者。
然喜人飲酒，見客舉杯徐引，則予胸中為之浩
然焉。落之焉，酣適之味，乃造於客，間居未嘗
一日無客，客至未嘗不置酒。天下之好飲，亦無

在余上者 車坡

○子瞻子由其侃師至此，後僧以路惡見止，不似僕
之所歷，有百倍於此者。丁未正月二十日書。車坡

○東坡飲酒此室，進士許毅商自丑年來，謝道一
杯而別。全上

○東坡居士酒醉飲飽，倚於几上，白雲左纏，清
江右迴，重門洞開，林壑全入，當是時，若有思
而無所思，以受萬物之備，慚愧。

○子由書孟德市見字予既少而異之以爲虎畏
不懼已者其理似可信然世未見席而不懼者則
斯言之有無終無所試之然嘗余少忠萬言
多席有婦人晝日置二小兒沙上而浣衣於水旁虎
自山上馳來婦人倉皇沈水避之二小兒就沙上自
若虎熟視久之至以首觸席庶或其一懼而兒
癡竟不知怪虎亦奔去意虎之食人先被之
以威而不懼之人威無從馳歟有言虎不食醉

人必坐守之以俟其醒俟其懼也有人夜自
外歸見有物踰其門以爲猪狗類也以杖繫之
即逸去至山下月的處則席也是人非有以
勝席而氣已蓋之矣使人之不懼皆如嬰兒
醉人與其未及知之時則虎畏之無足怪者
故書其末以候子由之說
○わんちを後くと二足踏んかえり
○要りたせぬ物の値を安くあり

〇 緋の衣着んば浮世が情くろま
 〇 本降りまうりも出て行く雨なり
 〇 舟をのりて扇の動く心
 〇 手の甲へ餅を受けたる煤跡
 〇 人を皆盲目に教習ぬり行ぬし
 〇 まむといふ心の交りの不奉公
 〇 言ひにえいとい徳利の口を傷り
 〇 西洋か日本へ金のつゝを分けけり

〇 銀行で子を産む嫁の持参金
 〇 笑ひにじむまむいゝ身産む汗をあき
 〇 玉手おしきまふときんいゝ殿もけ
 〇 先頭よふ分別をこすう出し
 〇 ぶらまけして二足逃けの足袋
 〇 裁縫婦ひねりの毛を銀をあら
 〇 我のくち格氣の帯の締りさぎ
 〇 今聞くと喜や格氣を隠してさ

- 胸の火がもえぬ女はきを手摺りし
- うーと見一収知恐ろしい神話か
- いはぬ格氣を大針に縫ふ
- リンきのあすままのてぬく
- 焚付の格氣の顔くもえて出の
- 手元一もええリン氣の糸車
- 年の付れ下ぬ女あ一目を付の
- おく取のえのふ腕のまつか(まの女の意)

- 愧えて毒と毒うーう向
- まが急いいうととせる縫りぬこ
- 勤付てせ房兼時を出して墨
- 女あ腕の雪月花に立ち
- 月夜鳥啼しせ房腕をまて
- 女あに威あつて種き種かつ
- 火を七つてこたつあをさーあ春
- 朝めくろ女房名のと女(まの意)

○ 細見、女あこいつと焼ぎせる
 ○ 胸ぐらのあゝ女あハ手を切る
 ○ 土手を行く女、目尻か上つてる
 ○ ゆい二本いれへあて、下めハにげ
 ○ 春枝のガブく酒を喰、あゝ茶一茶
 ○ 時と酒、四の五の言いたぬえ 井月
 ○ 初松、魚酒ハ四の五の言いたぬえ 井月
 ○ 樽の草や小言ハ百酒五杯 一茶

○ 酒過し、蕨枝やアインコンくと 井上
 ○ 平箱酒や雅波去、若の笑ハ顔 井月
 ○ 来、のからい、飲もあゝ、あゝ寝酒かゝ茶
 ○ めきく、と年ハ夢けり、あゝ三指 井月
 ○ 鴨、つゝや酒も油もるき 井月
 ○ 酒あゝとまゝ、あゝ花の宿 井上
 ○ 言、枕こゝろ、光細エる 井月
 ○ 花を、泣け茶を、いあ、唇もるゝ、あゝも 腹切

まへとわするるよ花 乃木希典

○ 春河の志りかたぬゆるはるけき

○ この淵に昇つま、のれる時を 一茶

○ 春の湯一春日の巫女の目：惚れに記

○ 鮎の子の白魚とす別れうら 芭蕉

○ 若鮎やふてふあんば岩の肩太極

○ 一のめや鶴を起ん魚浅し 芭蕉

○ 家ちかく 鶴の鳴きもいっ夜のま聞更

○ ままびきて火影行く 鶯や夜のみ 大、祇

○ 芭蕉秋の腔をかかつて夕涼 一茶

○ 蛙啼く夜やけくきみん 程儀 長山

○ お茶を橋んか巻ひまきん 熱心焙煎

阿いやも

○ 五月の十三日か二があらやよあろ、難日比布岩

今一茶

○ 壺にや踊りし五月や寝る 夏の 長の 中まとろし

○高士山の見える西の山

○おもしろい人いさうなまきものをあはれん犬の

ぬりそわらぬ

○枯ん枝に鶴のとくしり秋の暮 草堂

○福刈りて天下にわいのいし大に丸

○雪を射ぬ雲山子ハチの上千の

○家庫の崩し始めや紋所 化逆

○その初うび一ツ 踊んよるく蛙

○目が長いくとむねな地世 一原

○日が長いなんのとのたりくらり 花

○まかぬ氣の江戸の門は柳 うら

○手傳て虫を拾へ産の子

○老の身の日の水いふも泪 ふ

○むねだん身に勿体なさの白 水

○是程にけちな振七都 ふ

○西のやうにわると 吟

○江戸ずんれ大音あや時多

一三六

○そんのかかお敷敷の若木

○世に任ば飯のわく敷もはら

○我門や外箱も鳴かす尻もひら

○まふ常心のねあつるん

○敷敷しは膝をさす田植う

○敷の葉にいわしを配る田植

○名月れけろりとましか

○ふしぎ也生れぬ家むけの月

○つまらぬ日をまもギイツチ

○天下太平とまなかに

○書紙をぶら下げて垢のか

○煙を聞てんもやつばひ

○涼風も陣の木のまき

○海波のふきはや竿の夜

○筆も思ふふく出せりけり

○吹くる大筆の也りけり

○吹くる大筆の也りけり

こころみ

一茶

○出よ草 鏡をおろすぞ出よ草

○ざんぷりとは一両浴て像の影

○書(る)や石菖鉢と紋いぶりと

○おろしくハ汚ぬ先たとけよ雪

○清よ雪汚ぬ先たとけよ雪

○唐の餅雪より先は消れけり

○飛つや此界隈の雪捨ゆ

○廿二日はあつに中とかや

○七行やとんもいんぬ敷の家

○七月の大へらほれ日あつふ

つさしありあもまけんし月夜

の岩陰に棒のやうなる蕨

○鉄釘のやうなる蕨も都立

○焚はど休風がくんるおち景一景一景
 ○やふ島あいおち景を踏まひど
 ○名月や移るの島も天窓敷 杉崎
 ○今の世の糸瓜の皮もうんはひり
 ○我もて我つまつくや時子縄
 ○どればれい波の結とーらぬけり
 ○涼いさんおけの中も不二の山
 ○日本に這入口からさくら花

○掃海を山と見えしと秋の月
 ○まんとと親からさくく巻ふ
 ○人の世の幾んせんけの苔清ぬ
 ○此やうに枯れもてはむ世にふ
 ○雪佛犬と子どものお好うや
 ○世の中いかくのふしと白雲の佛はフツト清
 俊ひひり
 ○花散るやあはひりむも角田川

〇次けが飛ぶ住も春は櫻さか
 〇あまう湯のたらしくとも日永さ
 〇直る世を何んの因果ぞ庭の松
 〇雪ゆけく都のたはけ侍おもん
 〇夕立を三日待れせし三粒さ
 〇涼しさやみ投つける馬の尻
 〇暑き日やひやくとも鼻盤枕うち
 〇おとねや紋ふかき呼ぶ豆腐煮

〇あつこちの春はまきいづく花さか
 〇是虫のあは吹て貰つともさか
 〇登のあはかぞへるさか茶気さ
 〇涼しとや柳草刈の腰の笛
 〇食樂を年か暮ると考まひ
 〇涼しとん焼淀の体のあくらさ
 〇秋の雫ころび夜も又時ぬ
 〇とぶ蝶を憐れ給へさか

○うかし来て我をかばいの勢りぢ
 ○大ぬのくわらりと尻をかばいぢ
 ○どこせく荒いかいしなめりぢ
 ○まかばい三の四ツセツ六づかーや
 ○大ぬの溜んる道つを炬燵さか
 ○犬の子か追ふて行也雪礫
 ○狭くもいざ飛羽い鷹の足
 ○我鹿の板柱ばかう曲らぬぞ

○夕まは是切とばらりばらりぢ
 ○来か、りも一分別の蛙がな
 ○夕まや三文花もそんそよか
 ○はつ巻都の空いきれりいぢ
 ○身まよるぬ夕まはらりぢ
 ○雲よけの比らぬ所かーぢ
 ○思ふぬあゝ思ふかたつあゝ
 ○一晩に板柱をめぐりしきにはひぢ

春巻記

春巻記

春巻記

○牡丹打し父か忠をなつかしき 大島

○海苔の香やまたぬぬ海の日なつかしき 舞園

○呼ぶるきそあか中の空梅くさ 凡量

○更な夜や柳をはさくおのの聲 柳西

○振上り我手あめのおきの饅 信長 松香

○中くに獨るんは気月を友 甚利

○あゝ暑し油の木の叫音 天師

○あゝ心は持ぬぬかあうか 足道

○花に酒汗し牛のいく日 黄合太

○満柿や街道中へ枝をぬ 熊持

○髪をゆふ年の落ぬて煙燻ふ 白代

○所ありく鹿の背音し聊月 雷文

○とふ巻あんとはいけんも福ふ 前巻 大徳

○石の香や夏はあくと露日暮 毛道 殺生

○枝をくく世にふはくぬ蓮花 口

○髪風吹て暮秋歎するい誰か 憶老社 甚利

合巻

合巻

○ひやくと型をふくして盡寐た 廿二日

○牛部屋に飯の熱聞き残暑のふ 日

○塚もうごけ我泣こゑの秋の風 近き山の上

○又まうのうしろや寐し秋の風 遠き山の上

○馬に抱て残夢の月夜一茶の烟 同上

○義仲の寐覚の山は月悲し 燈山の上

○月いつし鐘の沈むる海の底 同上

○おのしみなきまゝあてや候ふら 日

○飲て死ぬけしきい見えま候り候 日

○市士の風や扇に載て江をみやげ 日

○二日酔いのかい花のちるあいだ 日

○花にうき世我酒白く今里 夏方知酒聖
負始は錢神
同上

○白魚の石にばはらば消ぬべし 日

○身んこんとあつめて春の眠 日

○きりくすま舌に啼火燧 日

○霜も着て風をぬ探の捨子 日

○六月火雲飛白雪

後

○四とおまひぬらん 夏の平紅白し燈火空も

てえり 剣ころも

晴見

○秋事如と目してや豆のふとり 大い丸

○馬鹿づらふ白き髪又あけたり秋 凡茎

○迷ふ紫陽花七色夏の色が定まらや花が

散る

○乾坤容我意

○涼風いじりてはる 雨の音

○若花零落る中看 志士遠源閑安老

○乍曇乍銷風 輝水半解半醒 夢中山

○曉若く呼夢花 嗽露 曉雷 暈 綠柳 梳 風

○人間憂 樂生 於 哀 泣 涕 對 花 不 是 花

○怪前夢 材 断 家 分 星 案 上 清 成 月 一 痕

○歌身 神 仙 女 風 流 花 月 魁

○清の在躬 氣志女神

韓退之

○無親無疎，自然不孤。無內無外，縱橫自在。

○樹甚從，翠峯一徑入湖心。不雨山長潤，無

雲水自陰。水橋荒藪合，宜波夜苦深。

猶憶西窗夜，鐘聲出北林。張祐孤山寺

○磨刀鳴咽水，水赤又傷手。泥賜新聲，

心緒亂且久。丈夫誓許回，憤惋復何有。

功名盡，願辭。戰骨當未朽。杜牧出塞

○澧水橋西小，終朝日。高松未別表，家村困

門巷多相似。愛之春風松，殼老。孟郊

○夜。城頭鴉亂啼，秋風反上馬。頻嘶一行

南去滿湘北，萍跡東來鳥。岸西百尺棟

梁，直若價。三春桃李自成蹊，功名到處

成何事。燭淚玻璃醉似泥。耶律楚材

○白髮滄浪上，全忘是異地。秋潭垂釣去

夜月叩船桴，烟影侵空室。岸潮痕在舟，

終年狎野鳥。未云且無楫。杜牧漁父

俞樾

七言古詩

○細雪微風岸危橋獨夜舟星隨平野闊
月潭大江流各豈文章著宦因克病休甄
之何所飲天地一沙鷗杜牧

○人之癖日若走如狂獨有酒何不出可足醉
身無熱利但欲心靜即身涼

○道間一冬入ぬ柳の葉山子子

○子もろくある山子の伏せも橋打の上わく雁
七行を乱す

○金盞無端留在于、粧色却避羞中人

於母市於加多可、依伽豆伎依之氏、人目
萬葉良須、伎却稱美乎

○如每晚過若溪東、烟草垂楊雨色濛

這裏誰知斷腸客、在思偏立不言中
浮落小や日毎にむ前のうらさ、夕逢い話さ

うらさよ

○藻のくせに浮世をのどく陸

○ 女 初生をやうと 初生
○ つき 橋の ありの 顔 あり なる 能
○ 在来 四角い といけし 月 宮 一 層
○ 我 死 する 養 守 と さん きり する
○ う そ くる 人を 何 と も う ち む さん 志 する 志
ふ ぬ お 女 あり せし
○ 月 の 顔 あり 雲 の 雲 の ち 三 圖
○ 白 つ から 我 乗 馬 の 近 あり 報 する 若 き

ゆき 打 見 せ かな 千 浪

○ 雪 山 ぬ お ぬ く し けり さま を 寝 居 する 美
秋 の 夜 の 月 蓮 月

○ こころ き 身 なる 役 あり 葉 山 子 花 葉 出 露
○ こころ 向け わ れ 七 寐 一 き 秋 の くれ 葉 草
○ 花 の 言葉 の 句 かな 花 と 花 と かな さん 二 よう 七
唄 の こと

○ 昔 の 雲 波 の と 花 あり 伏 する 秋 の 暮 一 葉

余 園 集

あまのこころ

〇 牛と時と涙もよ 鶏か 幽合ふもよ 一景
 〇 寝れ下を 風づらん しくもる
 〇 おぼろしく 踏めぬ ぬきま 迷ひた
 〇 栞の月一枚のこす 雨にうさ
 〇 初條や 人松陰を しのぶ
 〇 小下家をお 友の ちくげに
 〇 日る家 釘のやうな 手足と 結ぶ
 〇 死にが ぬく づゝ 寒さ とうふ

〇 ことしから まるまると けぞふ けぞふ
 〇 鬼灯と 膝の小 備はんと さんげり
 〇 鬼灯をと ころも つぶさや 背やの子
 〇 鬼灯の口 つきを 姉の 指南
 〇 今の世や 山の 栗に ち夜者 ちる
 〇 杉蔭に ねを 吹らふ 六十の ちる
 〇 小菊さる 提目の 恥に ちる
 〇 手枕や 小言い ちる ちる

〇 鳴き出しとま合ふも引ぬ蛙こゝろ一葉
 〇 小高みたる音頭しりの蛙あゝ
 〇 菊の花をすつれと睨む蛙こゝろ
 〇 ヤ蛙もなぐさぐさ口を持つれも
 〇 叱つてあやくとてさく蛙
 〇 羽はありとすんが天宮と蛙こゝろ
 〇 入おの鐘をつき出す蛙こゝろ
 〇 呼吸の張合は形も自覚も

〇 逃げと来て溜息つゝか初落
 〇 菊袖を脱とれのおちり蛙
 〇 大巻ゆかりとる蛙こゝろ
 〇 初落共千は喰ひぬくとや
 〇 初落をせ引かへすおん蛙
 〇 蚊のふしのあともおん蛙
 〇 楽しくと寝て笑きおん蛙
 〇 八里の植うん曲の蛙

○ 喰く毒七段もつけけり世の中いふ
 ○ 世の中いふく毒さへも上手下子
 ○ よい毒のつんはいとさきりくも
 ○ 足枕手枕麻の眩しき
 ○ 乳呑子の風よけにまの葉山子ふ
 ○ おとこいせこいせきあぬつ子ふ
 ○ 漁家寒し酒入頭の雪をやく
 ○ まつとぐい道あらいんて
 松喰丸日

○ 赤山子く顔を覗けりさうけり
 ○ 牡丹折りー父の怒どなるかき
 ○ 鶴頭やりの来るときなほ毒し
 ○ かきいげに着て出て実き
 ○ 毒くといほどたぐや海の内
 ○ 初毒や燈のたふあする顔と
 ○ ふくろふふの袋いんと
 ○ 南無女ふ乳を吞ませに
 化けて来い

命題

命題

雨声

大喜

毒草

太鼓

五夫

太鼓

一茶

川柳

○きぬくひのちとて身にする一履のみ

三

○ともしも七次き消しやういふまにさる

○草鞋いかにうめきものゝ涙くみ

○仲人の後家とやめぬの聖をぬき

○勝く来て土産の礼え腰をかひ

○田の面も我がうきと来て人の近づくかぬ

誰と知らぬや 大徳を

○心からよこしき降る雨のあつた風こそ秋

の衣をうつらぬ 日暮

○体は似て俺に似る子と首を 川

○晝あふんひえんがあふんもおとる

○閑とりのこわくかける涼甚

○一片春風帯 而飛

○遠使之而親其忠 近使之而親其敬 煩使之

而親其能 卒死之而親其節 急其之期

而親其信 委之以財而親其仁 告之以危而親

其節、醉之以酒而觀、則、雜之以處而觀、其色、
尤微、望而不肖、人得矣、其也

○上極則反、賤、下極則反、貴、貴去如、貴土、賤取
如珠玉、

○少有潤、留、既饒、爭時、

○富極無任、業、則貸、無常主、結、有、輒、湊、不肖
者、瓦、解、大史公

○月、讀、の、い、か、り、を、待、ち、を、か、く、り、ま、せ、山、路、は、案、の、

い、か、の、多、き、に、い、ま、

○中、途、え、て、え、も、流、え、ぬ、川、橋、を、行、か、り、ま、い、り、行、
き、い、ら、ま、言、る、

○と、く、く、と、垂、り、く、る、酒、の、な、く、ひ、さ、ぶ、姫、し、き、
言、を、さ、す、る、ち、の、こ、り、ま、曙、迄

○東、の、泉、ま、白、足、く、お、け、り、歌、を、よ、み、文、を、
つ、く、り、を、書、き、り、あ、う、け、い、ま、口、上

○お、が、ん、と、い、ん、ぬ、汲、む、妹、が、あ、さ、さ、ら、げ、の、や、せ、た、る、

春遊録
遊みんがふるも 不ふ来

○をしるふをせしきと思ひしは ぬ嘆きぬん
はあらしきこの雲 意の

○あしきの山下 ぬに影みんが 眉しうたに我
んをいしけり 能因

○いはばしる 雲のうくのさ 萩の萌え出る春
いろりけりかき 翁あむ考里子

○宇治川を船わたせと 喚ばしる 支えがこ

揖の書七巻 翁あ

○春日山あしを 照せしこの月 妹が庭を 泣け
わうけり 口上

○秋萩の枝もとををし 露おおき 寒くも時ハ
なうらけりかき 口上

○白雲に明うらか けり 飛かしの かつてんえわ
秋の夜の月 口上

○あかし思ふ草の 唐のよりの 雨に決る 添へ

春遊録

香山不と、きん 俊成

○阿耨多羅三藐三菩提の佛にそわがまの
松に冥加あるもたまへ 縁故のめ

○あまのほろ吹きすさみは 秋風をまき 雲をひ
れば 雲あり 逸彦

○上山は山かぜ 寒一ち、のみの父のみことの
足冷ゆらちか 平賀元景

○まみ川中洲とこわ 潮走ん 未あうらん

才ののち 井上文雄

○我が墓を訪ひこむ人 誰れくと 後えぬま
に 齋くつるか 長谷川玄

○ひさかたの天^{アスカ}は遠く 家に
帰ると 業と 巻 ^{山上 橋良}

○よみながら 夢と 耽^{たむ}と 思ふも 飛び
立ちかたの鳥に 一と 女と ぬか 日上

○急響 衝者 非千里 沛也

南無

南無

○有聲之聲、不過百里、無聲之聲、延及四海
○治國、譬若張琴、大弦急則小弦絕矣
○水濁則魚困、令苛則民亂、城濬則必崩
岸疎則必絕

○公叔子曰、晝則下暗、下暗則上龍耳、孰可暗
不能相通、何四之流也
○鷓鴣之度在春
○沙雁之月為時人

○若の如法少納言まらきけり

○花の解て机にわらふ胡蝶かゝ抱

○瓦焼く松のにけひやまの糸

○かく今に柳をこけける唐の糸

○如入夢射、久久方中、悟則刹那、履踐切夫
須資長遠、如鷓鴣兒、出生下來、赤骨體地
養未饑去、日久時深、羽毛既就、便解高
飛遠奔、所以悟の透徹、又要調伏、
山悟 禪の

○理須頓悟，事要漸修 同上

○南泉云：我十八上解作活计。赵州云：我十八上解破家散宅。

○说得天，不如行取一尺；说取一尺，不如行取一寸。 大惠案中语 洞山又曰：说取行不得底。

○众生狂乱是病，佛以般若波罗蜜药治之，病去药存，其病愈甚。 大惠语

○若向外得一知一解，将为得道，且没交涉。若运粪入，不名运粪，出污秽心田，所以道不是道。 冯山和语

○如龙得半盖水，便能兴云吐雾，降霖大雨。那裏祇差去大海裏，輒谓我有许多水也。 大惠语

○智论曰：学习外典，如以刀割泥，泥无所成，而刀自损。又如视日光，令人眼暗。

俞樾

○禍患在於隱微，發於所忽。大受延命者

○自損者人益，自益者人損。情之得矣，豈容易乎。黃龍南語

○物暴長者必夭折，功速成者必易壞。不推久長之計，而造卒成之功，皆非遠大之資。黃即武

○志者氣勝，志則為小人，志勝氣則為端人。正去氣其志齊，為得道賢聖。有人則狠不受規諫，氣使然也。端心之士，雖強使不善，寧死

不二志使然也。重卷行心者

○逆境界易打，順境界難打。逆我意者，只消一箇忍字定着。少時便過了，順境界真主無你回避處。如磁石與鐵相吸，彼此不受合化一處。大惠和尚

○古德曰：生也，猶如著衫；死也，還似脫袴。不以生死為大憂，可矣。

○但令心念澄靜，紛擾？愛，心好作工夫。

四接錄

○佛曰：心思惟心，測度如來山覺境界，如取螢火燒須彌山。

○有時奪人不奪境，有時奪境不奪人，有時人境俱奪，有時人境俱不奪。臨濟禪師（四料簡）

○善知識者，難得遇，難得逢。譬如林天投一芥子安下界針鋒上，猶易；值明師道友，得受正法，甚難。如九天九十六種外道，皆求出離，因遇邪師。

及沈生死

○學道人逐日，但將檢點他人底工夫，常自檢點，逆業無有不辦。或喜或怒，或靜或鬧，皆是檢點時節。大惠禪師

○燎原之火，生於焚；懷山之石，漏於涓。夫水之微也，積土可塞；及其盛也，漂木石，沒丘陵。火之微也，可於可滅；及其盛也，焦都邑，燔山林。此夫愛溺之水，瞋恚之火，曷嘗與字。華嚴經

○晦堂云：沙見世間貓捕鼠手，復目瞪視而不瞬，
四足踞地而不動，六根順向首尾一直，然後拳無不
中，誠能心無異像，是徒妄想六忘寐靜，端坐
默究，萬不失一也。

○直似大死底人，絕氣息，然後蘇醒，始知廓
曰：太公虛，曰：任理以。

○大意曰：近世夢以邪法橫生，瞋眾生眼者，
不可勝數，若不以古人公案，奉為提撕，便如

盲人攷却手中杖子，一步也行不得。

○大意曰：工夫不可急，急則躁動，又不可緩，
緩則昏沮矣。

○朱世英問晦堂曰：君子不幸小有過差，而少
見指目之不暇，小人終日造惡，而不以為然，其故
何哉？晦堂曰：君子之德，比美玉為有瑕，生內必
見於外，故見者紛異，不得不指目也。若夫小人
者，日用所作，無非過惡，又安用言之。

○先聖曰、寧可破戒如須彌山、不可破邪師甚二邪
會、如蚊子許在栴檀中、如油入麵、永不可去、

○浮山遠和尚、謂道五真曰、學未至於道、銜翅
見子、馳騁核解、以口舌辨利、相勝者、猶如屎屋
塗污丹墀、祇增臭臭耳、

○黃檗和尚曰、今時人祇欲得多智多解、廣求
文義、喚作修行、不知多智多解、翻成壅塞、
唯知多些兒酥乳喫、消些不清淨、他不知、

○近日禪者、以覺識依通為悟明、以穿
鑿機緣、倚技為參學、以陰怪為語、為提唱、
以破壞律儀為解脫、以交結貴達為緣、拔位
為出世方便、中華書局

○如人上樹、口銜樹枝、脚不蹋枝、手不攀枝、拈
小忽有人問、如何是祖師、西來意、不對他又違
他所問、若對他又喪神失命、當任麼時
作麼生、即得、香巖和尚

○靈源謂山樵曰：衲子雖有見道之資，若不深蓄厚養，終用必峻暴，非特無補教門，將恐有招禍辱。

○山樵謂佛鑑曰：白雲師第動用舉措，必稽往古，嘗曰：事不稽古，謂之不法，予多識前言往行，遂成其志，然非特好古，蓋今人不足法。

○方上之士不以名位為榮，達理人不為抑挫所

困，其有承恩而効力，見利而輸誠，皆中人以下之所為。佛鑑初身

○若不斷淫修禪定者，如蒸砂石欲其成飯，徑百千劫，祇名熱沙。

○若不去淫，斷一切清淨禪，若不去酒，斷一切智慧種，若不去盜，斷一切福德種，若不去肉，斷一切慈悲種。智覺禪師

○寧以熱鐵纏身，不受信心人衣，寧以洋銅

港口不受信心日人食。

○趙州和尚曰：你向衣單下坐十年，若不會禪，截取去僧頭去。

○貪者因書言，富者因書貴。王荆公

○一徑茅堂四面花。

○春眠喚醒倚窗紗，水鳥聲中婢報茶。
旭日未昇船未走，閑看倒影一堤花。鵬心以頭
不識の

○霞林遠山風力和，滿堤花影浸平波。哀

絲豪中紛如沸，春心漾時船正多。同上

○一架吟檣枕墨池，黃鸝即自雨中啼。雨於
染悉於儂好，竹表空銜煙趣更奇。同上

○坐屋月瓦上，暗潮拍釣墻。紅燈風撲滅，
螢火墮欄干。同上

○坐月向紅檣，清光滿蓼沙。嫦娥如有意，
那間去原秋。同上

○漁艇帆寬最善文，葦洲花白入殘年。江

送道子赴考少擣月村砧隔水烟 同上

○一孤長海來自空，小舫輕艇碧波中。垂竿

得去坐船首，晴午擬帆張順風 同上

○曉風戰綠荻，盡沙。霓彩跨江而正收，散近

行帆抹岸角，岸頭人踏過帆頭 同上

○衰顏比似荻莖萎，流棹東西艇不維，無

用存身吃死飯，有緣惠石築生碑，未如吳

日葬魚腹，但悔當年縮席籃，罷釣歸來呼

碗酒，醉吟擁鼻被鬼嗤 晴窗

○橋 之 挑 之 艸 之 不家 之 其打

○古 之 木 之 不 之 花 之 太 之 祇

○不 之 行 之 舟 之 過 之 但 之 有 之 鳥 之 呼 之 水 之 有 之 天 之 水 之 收 之 漁

火 之 出 之 荻 之 蒲 之 晴 之 窗 之 江 之 歌 之 吟

○光 之 无 之 無 之 復 之 画 之 船 之 過 之 烟 之 罩 之 長 之 堤 之 雨 之 一 之 裏 之 漁

體 之 看 之 他 之 數 之 之 之 春 之 熟 之 殘 之 魚 之 向 之 晚 之 春 之 多 之 同上

○江 之 波 之 碎 之 月 之 夜 之 漸 之 回 之 前 之 灣 之 秋 之 色 之 入 之 悲 之 苑 之 枕 之 上

草堂
管聽人定後，櫓聲去處，日上

○金龍山畔秋初冷，今戶橋邊月欲沈，知向蒼原賞燈火，快帆半夜走江心。日上

○江心月湧浪如銀，旋看綠雲遮桂輪，波影乍明還乍暗，無心雲恨有傷人。日上

○風澹夜將半，天豈弱怪雲堆，火閃知舟是，江鳴報雨來。日上

○罾前鵝鳥起，岸暗水光浮，側臥吹烟處，

曉帆上枕頭。日上

○寒雨江天曉，扁舟逐水渡，漁蓑何等苦，忍說畫中人。日上

○秋暮○方深後，灑天，水光如練露光新，凄然咽月津如沸，万種出愁，日上

○却人載酒逐涼颼，撒醉照豪撐碧漪，背露船窗紅拂妓，影臨水鏡雪衣兒，尚無虛熱侵茅草，只有歌聲出柳枝。日上

魁風殊爽絕，北窗早已占秋思。日上

○祥枝報齋長命寺，春風吹解不梅村。柳花
亦漲柳枝漫，鴨嘴船衝鷗羽翻。霞淡遠山梳
翠鬢去，草芳浪蝶惹迷魂。踏青兒女紛連
袂，無客不推一斗樽。日上

○凡物之聲，大抵隔聽為好。溪山木石琴瑟等聲，
最為雅矣。鳩喚向林中，一尺聲響於月夜，
甚於陽春。雪聲隔窗，皆可愛也。山行伐

木聲，溪石水聲，並宜遠聽。越船之口生，
漁浦之笛，遠而自有韻。寺鐘城鼓，遠亦
不無趣。如陸聲近枕，不堪喧聒，而隔則可
聽。犬聲本惡於聽，隔林則趣。鳴茅如車，
且其報有村。山行中使人生去去意，是本
可之聲聽也。馬食草原有何趣，猶寒野
之泊，隔空之大成，故矣。晁氏不謂山與
晴，人不寐，臥聽蕭蕭馬斃殘，疎是也。琴

新上可直亦一の言、今隔九聽之、殊是有趣
云々形字

○まゝとくところくも謀めてこそ墨繪の
鳥あらんん叶り

○いらくんの開くこまの古に八入つ思ひも
世まひん 希世

○金龍山下起金波、碎地千金散墨河、别有
幽在川、刺お、世ま深、雲月明、男

○鬼子研墨前、高^三屋敷、長年花晚、忙人
瓜屋、柳、挿、籃、輿、上、以、保、深、彩、輪、柳、邊

○菘、歌、葱、睡、新、有、雨、村、頭、袖、子、弄、金、黃、
村、厨、誰、道、之、時、味、先、婦、朝、供、香、致、湯、日、上、

○孟、冬、月、雉、為、屋、突、歲、疑、懷、今、始、休、
一、笑、西、村、寺、前、路、芒、花、入、香、化、鶴、鶴、日、上、

○賤の女や、袋洗の糸の汁、鬼母、
○こんはどの三味線、暑く、膝の上、十善、未、山

繪巻

○年のものくふるや小庭は風の吹く
 の枯木の影を花の影と思ふは秋の意をしる
 ○ゆけやまさきの夜も杯盤狼藉の多し
 ○秋の尚ほかりしと入目ころ子 産子
 ○戸を叩く狸と秋を惜みたり甘苦打
 ○草枯れて狐の元脚もさびしるの
 ○やぶくや河内もさびしるの小提燈の
 ○おかまの鈴とゆりつつ夕涼一茶

○山は深く自ら葉を枯れて穴耶王坂記銘也
 ○天香豆丸董人碑仙骨何曾帯似若花也
 ○餅丸看安有影書燈亦晴亦以扶白馳時
 無考、尊酒半後半冷
 ○品茗評香世上炎凉絶口詩卷菴竹一因
 時助此清淡心
 ○竹橋持月煮時知甘の趣苦楊近風吸時

○ 飄雨松聲入鼎來，白雲滿壑花徘徊。
○ 夢開梅海內，天子茶熟除人間，睡度
○ 此花何可揮金瓶，不教塵風清，斜又橫，
為真如野人操，亂頭粗服，對公卿。山陽葛

○ 臥游且作溪山夢

○ 乾坤之旅舍

○ 世貴口中餐，煮茶心思淡，終古無人識

玉泉嘗苦心，茶

○ 未解喜沁重，既解愛沙輕，一輕又一重，

瓢也善送迎。蓬室到舍用九酒瓢贊

○ 雲和直種草之珍，茗說香分酒，讓釀一縷

淡烟客相思，半篷織絲慰精神，世間多少

淡厚味，此君澹泊取可親。山田真南越烟生

○ 十丈蒼天澗底松，至今未敢拜大夫，封着

他知少愁顏色，雪夜中紅天綠更清。方腐

○宜白能留月

○心闲物自闲

○五洲觀掌內萬象閱眸前

○繡本多依格紙本有真趣

○不煉金丹不生得。不為高愛不耕田。問來

孰寫古山臺。不使人間造業錢。唐白帝

○折蓬好友與他贈。一尾鮮魚柳貫腮

○至味心難忘。閒情手自煎 文淵

○人外之游

○世上風波險。不如牛背安

○身無憂。懶帶安枕室有餘。問自煮茶

○蘇長公賞心十六樂事

涼雨竹窗夜話 清溪溪外行舟

暑正臨流濯足 雨後登樓看山

閒齋忽逢陶謝 掃客不着衣冠

午倦一方蕉枕 晨興半炷名香

月下東隣吹笛

隔江山寺少鐘

花塢尊前微笑

柳陰堤畔行吟

飛來珍禽自語

乞得名花盛開

客至汲水煎茶

撫琴聽石知音

○支房四友 古詩卷八 穀文

竹管城羨

毛元銳

即是侯

石臺中

好晴侯

栝知白

松滋侯

易玄光

○志在名山詩酒

○冷月無聲

○寄臨川堂

○天地錫靈知 匪橫易自在 尚能不失鶴 乃

中興一悔 副島程臣

○汲泉煮茗 丹符遊未煙 霜氣揮石壁

詩 白巾帶玉 墨痕香

○看沙橫行有疾時 大勝本為 霖解回後

○夫身畫紙為橫向 稚子敲針作釣鉤

- 天南北北年々暮惟有暮花是故人 卷下丁
- 湯嫩亦輕花不散 口甘兼神爽味偏長 上味茶
- 瓶底風相扇 盃中一月亦香 地在
- 茶儿若生也 まゝのまゝの 浮世の家
- 皆人の冬に社に神ハ有し心の内は神し まゝの 茶
- 皆に花世界云花又入花 まゝの
- 花時教未佳 新柳亦行る



